

令和七年度 長岡大学 一般選抜（I期）

国語

■ 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

少し前のことになるが、私はある評論家がインターネットのウェブサイト上に、八坂神社の前にコンビニエンス・ストアができたことはけしからんと憤慨しながら書いているのを読んで、乱暴な口調の割には何事においても浅薄で一向に核心に触れないのが常のこの人らしい話だと苦笑したことがある。それならば、そもそも祇園の交差点をあれほどの量の自動車が往来していることはどうなるのだろうか？ 外国産の高級車も走っていれば、市バスも轟音を鳴り響かせている。そうした風景には一向に目がゆかず、殊更にコンビニエンス・ストアなどに着目してみせるところが、私にはなんとも安易な語り口のように思われたのである。

昔からよく京都を訪ね、この町に特別の思いがあるという人の間では、京都の景観破壊を嘆じてみせることはちよつとした流行なのかもしれない。これはしかし、おそらく今に始まったことではないであろう。二条城などというものが建てられた当時も、さすがは田舎侍の御大将、とんでもないものを造ってくれたわいと悲憤慷慨する人たちも多かったのではあるまいか？ これは今日のビル建設などよりも、よほど深刻な決定的な「景観破壊」であったはずである。

私は、どうも昨今のその手の議論に胡散らしさを感じてしかたがない。もちろん、何でも好き放題にぶち壊して、高層ビルだろうとパチンコ店だろうといくらでも建てればよいなどと乱暴なことは言わない。しかし、それでは一体、彼らがいつごろのどういう京都を残したいと思っているのかと問えばきわめてあいまいである。先の評論家ではないが、結局はおのおのの記憶の中にある「あの日、あるとき見た京都」ということでしかないのではあるまいか？ それはいかにも恣意的である。京都という町の長い歴史に比して、彼の個人的な愛着の歴史とはなんとちっぽけなものであるろう。

同じことは京都の町家をめぐる議論についても言える。こちらは実際に京都に住んでいる人たちの言うことであるから議論にも迫力があるが、とはいえそこで保存すべきと主張されている風景にしても結局は彼らが幼少時に慣れ親しんだ割と最近の町の姿である。五百年前にその一帯がどういう風景であったのかということは一向に議論にならない。平安時代に比べればそれらの町家にしても十分近代建築じゃないかという反論は私は説得力があると思う。

ではなぜそうなのであろうか？ 私はこの問題は、京都という町の本質的な性格に関係していると思う。京都という町は、永遠に無常をかなしみ続ける町である。『伊勢物語』の「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」ではないが、昔の愛人を訪ねて荒れ放題になった家屋に愕然とするという場面は古典の中によくある。人のはかなさと建造物のはかなさとは同じ無常の底知れぬかなしみの渦中にある。人が死ぬように、建造物も壊れる。人が移り変わるように、風景もまた絶え間なく変化する。そうした存在の絶望的な不安を慰めるためにこそ、不変の聖所としての神社仏閣がかくも膨大な数築かれねばならなかったのではあるまいか。永遠に変わらない場所である神社仏閣と無常に変わりゆく江湖の人間の居住区、その残酷な対比こそが京都という町のいわば凄みなのではあるまいか？

八坂神社の前が今のような景色になったのは、たかだかこの数十年ほどのことであろう。私は千二百年間の長きにわたって絶えざる変遷を繰り返してきたあの場所の風景を、たまたま千百何十年目かに出現した一つの風景に決定し、それを永遠に保存するなどということこそ京都という町に対する最も甚だしき誤解に基づいた蛮行であると思う。それは京都が、今現在も生き、生成と消滅とを繰り返しているということを忘れた人の愚かな考えである。一人人は、子供のころの美しい母親の姿を愛しているからといって、彼女の生の変化を認めず、殺して冷凍保存にすることなど考えるであろうか？ 彼らが愛しているのは、現実の生きた京都ではない。彼らが憤っているのは、京都そのものの破壊ではない。それは単に彼らの記憶の中の京都にすぎない。変化することがなくなったとき、京都はもはや博物館のガラス・ケイスの中に収められたミイラと同じ、死んだ町となるであろう。それを喜ぶのは、ずいぶんと悪趣味ではあるまいか？ 三条通りに感じのいい——観光客の大好きな——喫茶店がある。火事になった後

に、建て替わったら以前の内装とほとんど同じだったという。それとてどれほどのことであろうか？ 百年、二百年たってみれば、この町の長い歴史の中に一瞬現れては消えた幻のようなものではあるまいか。そうした幻がこれまでどれほどあったことであろう。それらが無限に集積し、今眼前に眺めている光景ですら一つの幻であることを疑わせる。変わり続けた結果、かつて一度として何かであったことがない。しかも、その虚無の表層のめくるめく衣替えの連続が、紛れもなく京都であるとしか言いようのないようなある固有の雰囲気醸成している。それこそが、この町の本来の魅力なのではあるまいか？

京都の景観保護の問題を議論する際に、パリやローマといったヨーロッパの古い都市を例にあげて、その町並みの保存状態のよさを強調する人は多い。しかし、だれが住もうと百年、二百年という間、けんろう堅牢な石造りの建造物が変わらぬ姿のまま立ち続けているそれらの町と、木造のゆえに人と家屋とがそのもろさにおいて結び合い、やがては例外なく滅びることの宿命を共有していた京都の町とは、そもそも同一に並べて議論すること自体が無理な話である。

京都に住み始めて、私は今年で九年目になる。しよせんはよそ者である。それこそ生っ粋の京都人という人たちからしてみれば、私がここで熱心に京都について語っていること自体が、ずいぶんびんしょう憫笑を誘う話であるのかもしれない。しかし私は、今書いたようなことに気づき始めてから、B以前よりもずっとこの町のことが好きになった。

かつて子供のころに訪れた京都は、私を観光都市としての顔で丁寧を迎えてくれ、洗練された作り笑顔で見送ってくれた。大学時代に数年間をここで過ごすこととなったときには、学生の町としての顔で大らかに受け入れ、文句一つ言わずに好きなことをさせてくれた。そして今、それらの別々の顔とのつき合いがひととおり終えた後になって、私は初めてその奥に秘せられた本当の顔ともいべきものを少しずつうかがい知るようになった。それは思いのほか、かなしい顔だった。なるほど、よそ者に見せてよい顔ではなかった。けれども私は、それを美しいと感じた。そして、それを隠そうとすることを、やはり奥ゆかしいと思った。

(平野 啓一郎「無常ということ」『新潮(二〇〇二年新年号)』による)

問一 傍線部ア～ウの言葉の意味として、本文に即して最も適切なものをそれぞれ一つずつ次から選び、番号で答えなさい。

ア 悲憤慷慨

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 賛同できず強く抗議すること | 2 悲しみのあまり、あつけにとられること |
| 3 過失や欠点などを責め立てる様子 | 4 運命や社会の不正などを憤って、悲しみ嘆くこと |
| 5 人々が苦しみ泣き叫ぶような、非常にむごい状態 | |

イ 胡散らしさ

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 疑わしく、油断ができない様子 | 2 様々な考え方によりなんともいえない様子 |
| 3 とてもあいまいな様子 | 4 明確に事実とは異なる状態 |
| 5 誰もが知ることをもっともらしく伝える様子 | |

ウ 恣意的

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 他者の功績を自分のものとして伝える様子 | 2 他者の意見をまったくきかない様子 |
| 3 成り行き任せな様子 | 4 複雑なことがらを極端に単純化すること |
| 5 個人の意志や感情に基づいて行動する様子 | |

問二 波線部A「京都という町の本質的な性格」について、筆者はどのように述べているか。本文の表現を使って四〇～六〇字で説明しなさい(句読点を含む)。

問三 波線部Bについて、筆者が「以前よりもずっとこの町のことを好きになった」理由を、本文の内容をもとにして、六〇～八〇字で説明しなさい(句読点を含む)。

問四 二重線部①②について、以下の各問に答えなさい。

(1) 二重線部①「その手の議論」とは何を指しているか。本文から「その手の議論」の具体的な内容を一つ選び三〇〜六〇字で説明しなさい(句読点を含む)。

(2) 二重線部②「彼ら」とは誰を指しているか。それを説明した左の文中のカッコ内に入る最も適切な語句を本文から抜き出して記入しなさい。

八坂神社の前や京都の町家など、京都の() ()を求める人びと

問五 筆者の考えと一致するものに○、一致しないものに×を書きなさい。

- 1 昔の愛人を訪ねて荒れ放題になった家屋に愕然とするという場面は古典の中によくあるが、それらは無常のかなしみを表現している。
- 2 京都についても、パリやローマなどヨーロッパの古い都市の町並みの保存状態のよさに見習うべきだという考え方には一理ある。
- 3 かつて二条城が建てられた当時、その建造に対して批判的な声が強かったと思われるが、そうした批判は、現在の神社前のコンビニエンス・ストアに憤慨する姿勢とは根本的に異なっている。
- 4 京都の町がよそ者に対して向ける顔について、同じよそ者でも観光客や学生に対する顔と京都で生活を始めた人に対する顔との間には違いがある。
- 5 三条通りの感じのいいある喫茶店が火事になったが、以前とほとんど同じ内装で建て替えられた。筆者は、この喫茶店を長い歴史の中でもずっと変化しない現在の建造物の例として取り上げている。
- 6 昔からよく京都を訪ねて特別の思いを持つ人が京都の景観破壊を嘆く気持ちは、一般の人の京都の景観について抱く気持ちよりも大切にすべきである。

二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

ア 二〇二二年二月、漫画を出版した。『マンガでわかる災害の日本史』(池田書店)だ。

私は絵こそ描いていないが、ストーリーは考えた。この漫画の主人公は小学生のミチちゃんとマリちゃん。それに理科の頼母先生の三人である。この三人が修学旅行中、西郷隆盛像の前で、地震の大揺れに遭い気を失ってタイムスリップしてしまう。気が付くと、眼前に犬がいる。しかも、犬が、しゃべった。「ワシは大西郷先生から郷中教育を仕込まれた薩摩犬ツン!」。犬はそういう、歴史上の災害現場に三人を案内する。この犬は薩摩武士の教育法「詮議」の作法で、ミチちゃんとマリちゃんのサバイバル力をキタ¹えはじめる。犬は歴史災害の現場をみせ「この場合、君ならどうするか」と質問する。三人が「正しく答えられれば、もとに戻れる」という。それで三人は犬と一緒に、歴史上の地震・津波・噴火・台風・水害・土砂災害をみて歩き、教訓を身に付け、無事に現代に戻ってくる。ざっと、こんな話だ。

東日本大震災から一〇年たった。私はこれまで『天災から日本史を読みなおす』(中公新書)などで防災を訴えてきた。ただ、本が苦手な子もいる。漫画なら読んでもくれるかもしれない。そういう思いで歴史漫画に初挑戦した。作画は備前^{びぜん}やすのりさんで実的に確だ。防災監修は関西大学社会安全研究センター長の河田恵昭^{かわたよしあき}特別任命教授にお願した。その時分、新型コロナウイルスの感染拡大がシン²コクで、感染症の大流行も災害の一つだから「感染症の歴史」にも一章をさいて漫画化した。一五〇〇円(税別)と決して安くはないのが申し訳ないが、優秀な編集者・ライター³の協力もあり、値段に見合った内容の濃い本には仕上がった。ほっとしている。

漫画といえ、よしながふみさんの長編『大奥』(白泉社)が、同じ頃一九巻で完結した。その特装本で対談したが、この作品は実に面白い。フィクションなので男女の立場が逆転した江戸時代を描いている。つまり、しばしば将軍が女で大奥に美男子が集められているカクウ³の世界を描く。令和の日本を語るうえで、この視点は面白いと思った。

いまだに日本社会は「高齢の男性」が会長・社長・校長・政治家など物事を決める地位で圧倒的比率を占めている。社会の構成員の声をまんべんなくハンエイさせるにはリーダーや会議メンバーに「女性・若者」が含まれていて、その発言が尊重されていないければおかしい。でなければ、その集団は衰退する。当たり前だ。現代は新しい技術が次々に現れ変化が急速である。若い人の頭脳と意見が必要だ。七〇年以上前は、伝統的な農業社会で戦争もヒンパン⁵。マッチョなタテ型社会になりやすく高齢男性の経験とやらが無条件に尊重されたが今は違^イう。サービス業が七割以上。海外との交流も激しい。若者・女性・マイノリティなども多様な考えや情報は社会発展のヒントで宝だ。これを生かせない国や組織は衰え滅ぶ。

日本列島の人々は「永く居る人」に高い地位を与えやすい習性をもつ。「当選回数主義」で有力政治家は高齢と世襲ばかりなのはそのせいである。明治維新はその逆をやった。門閥世襲を破壊した。西洋化近代化の新知識を重んじて身分の上下よりも知識の有無で、人を登用した。そのエネルギーはすさまじいものだった。それから一五〇年、我々の社会は再び化石化しつつある。そう思って調べ始めた。よしながさんの漫画『大奥』のように女が強い大名家は本当に存在しなかったのか。すると、それらしき藩の一つだけ見つかった。次項では、その不思議な藩の話をしたい。

(磯田道史『日本史を暴く』による)

問一 傍線部1〜5のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は楷書で丁寧^ニに正確に書くこと。

問二 波線部ア「二〇二二年二月、漫画を出版した」とあるが、筆者はなぜ漫画を出版しようと思ったのか。説明として最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 今までも本で防災を訴えてきたが、新型コロナウイルスの感染拡大がしんこくになり、子供たちに感染症の防御策を伝えるには漫画が最適だと思ったから。
- 2 関西大学社会安全研究センター長の河田恵昭特別任命教授が防災監修をして、備前やすのりさんが絵を描いてくれることになったから。
- 3 今までも歴史上の災害を本に書くことで防災を訴えてきたが、漫画であれば、本を読むのが苦手な子にも災害から身を守る術などを伝えられるのではないかと考えたから。
- 4 東日本大震災から十年経っても、『天災から日本史を読みなおす』(中公新書)という本を子供たちが読んでくれないので、漫画化することによってより多くの子供たちに読んでもらいたいと思ったから。
- 5 今までは本の中で歴史上の災害を紹介していたが、今の子供たちの中には本を読むのが苦手な子もいるので、漫画なら読んでもらえて、歴史上の災害を知ってもらえると思ったから。

問三 波線部イ「今は違う」とあるが、筆者は何と比べて今はどう違うと考えているか。説明として最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 明治時代は身分の上下よりも知識の有無で人を登用しようとしており、女性や若者が組織の意思決定に関わっていたが、今は高齢男性の経験が無条件に尊重される社会になった。
- 2 七十年前は戦争も多く、農業が中心だったので、男性の力強さや高齢者の知恵が尊重される社会であったが、現代はサービス産業化が進み、人間の力強さや知恵よりもAIが重視されるように変わったのだから、女性や若者を登用すべきだ。

- 3 よしながふみの『大奥』によると、江戸時代は今とは男女の立場が逆転しており、女性や男性の意見が幕府の意思決定に生かされていた。しかし、明治維新以降、近代化が進むとともに、政府の意思決定には男性の意見しか生かされなくなった。

- 4 伝統的な農業社会で戦争も多かった時代に重視されていたのは、男性の力強さや高齢男性の経験だったが、産業構造が変化しグローバル化も進んだ現代においては、様々な属性の人たちが持つ多様な考えや情報こそが重要である。

5 伝統的な農業社会は戦争も多かったため、男性が重視されていた。しかし、現代はサービス業が盛んになり、海外との交流も活発になったため、高齢の男性よりも女性や若者が必要とされるようになった。

問四 本文の構成を説明した文として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。

- 1 本文は大きく二つに分けられる。前半は、筆者が描いた漫画の内容と出版に協力してくれた人への謝辞、漫画『大奥』の作者の着眼点のすばらしさが書かれており、後半は、筆者の現代の日本社会に対する考察が書かれている。
- 2 本文は大きく二つに分けられる。前半は、筆者が出版した著作の内容や出版に至った経緯などが述べられている。後半は、漫画『大奥』の視点のユニークさと、その視点をふまえた筆者の日本社会に対する考察が書かれている。
- 3 本文は大きく三つに分けられる。最初は筆者の著作の内容説明である。その後、漫画『大奥』を例に歴史漫画の面白さについて述べ、最後に日本の歴史に対する筆者の考察が述べられている。
- 4 本文は大きく三つに分けられる。最初は筆者の漫画の内容と漫画出版に至った経緯が述べられている。次に、漫画『大奥』を例に漫画の効用について述べられている。最後に、現代日本に対する筆者の苦言が書かれている。
- 5 本文は大きく三つに分けられる。最初は筆者が描いた漫画の内容が述べられている。次に、この漫画を描くに至った経緯と、漫画を描くのに協力してくれた人たちへの謝辞が書かれている。最後に、女が強い名家について書かれている。

三 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

すでにたびたびのべたように、知的生産の技術というものは、一般にあまり開発がすすんでいない。しかし、そのなかでは、文章の技術は、まだしもいちばんよく開発されているといえよう。「ゲンコウのかきかた」¹という本はなくても、「文章のかきかた」の本なら、いくらでもある。もし、自分の文章をみがかうというのなら、そのような本をよんで、独習することも、ある程度はできるだろう。文章作製技術のショウサイ²については、そういう本にゆずって、ここにはのべない。ここでは、基本的な問題点だけを、いくらか指摘しておこう。

文章の本はいろいろあるが、それには、おおわけして、ふたつの系列のものがあるようにおもわれる。第一は、文芸的な文章に重点をおいたもので、第二は、ビジネス的な文章に重点をおいたものである。文芸的文章法は、もちろん文芸家のシツピツ³したものがおおいし、ビジネス的文章法は、もちろんビジネス関係の人がかいたものがおおい。

現実に自分の文章をきたえたいという人たちの要求が、一般に、このふたつの方向に**しぼ**られているのかもしれないが、わたし^ア どもの目からみると、このような二極分解は、すこしこまるように**おも**う。文芸といえば、主力は小説で、ビジネスといえば、主力は手紙と広告である。文章は、なにもそういうものにかぎらないではないか。現代人によってかかれていた文章の大部分は、じつは文芸的文章でもなく、ビジネス的文章でもない。いわば、ただの文章である。しいていえば、単なる知的文章、記述的文章とでもいえるだろうか。そういうものが、今日の「情報」の大部分をしめているのである。

しかし、現実に文章技術の本が、文芸的とビジネス的との、ふたつの系列にわかれてしまっているとすれば、どちらのほうをえらぶべきかという、わたしは、一般論としては、むしろビジネス系のほうがよいとかんがえている。文学者のかいた文章論は、しばしば役者の芸談みたいなもので、個人的でもしろいけれど、ふつうの人間には参考にならないものがおおい。作家の文章は言葉の芸術である。わたしたちがかく文章というのは、べつに芸術である必要はない。

失文症や文章アレルギーがでてくるのは、ひとつには、文章を文学だとかんがえるからではないか。文章というと、なんとなく文学的な文章のことをかんがえるくせがついてしまっているのだ。たしかに現代では、むかしのような美文調の文章は、はやらなくなつた。しかし、それにかわつてもはやされる文章は、文体はかわつても、依然として「感動」的な文章なのである。どのような文章が、ひとに感動をあたえることができるか、という観点から、文章が評価されるのである。つまり、芸術的ということなのだ。それでは、芸術の才能にめぐまれた、とくべつのひとにしか、文章がかけなくなるのは当然である。

今日、すべてのひとにとって必要な、知的生産のための基礎技術としての文章は、ひとに感動をあたえるような、芸術的な文章ではない。ものごとと、思想とを、まちがいに、わかりやすく、ひとに伝達できるような、機能的な文章なのである。

文学を、わたしは否定しているのではない。芸術的な文章は、もちろんある。しかし、知的生産の技術として、訓練を必要とするのは、むしろ非文学的な文章である。文学作品は、あまりお手本にならないとおもう。

むかしは、文章は、文字のうつくしさと、つよくむすびついていた。「書」ができれば、文章をかく資格がなかった。文章は、かいた文字の造形芸術的価値と、わかちがたくむすびついていたのである。字がへただから、手紙をかかないというひとが続出したのは、もつともな話であった。字のじょうず・へたが、文章の価値を決定したのだから。

近代日本語が、文章を書道から解放することに成功したのは、大進歩であった。文章は、造形芸術から独立して、独自のものとなりはじめたのだ。わたしは、これをさらに一歩すすめて、文章を、文学から解放しなければいけないといっているのである。文章を、言語芸術から独立した、ジュンスイなコミュニケーション手段として発達させなければならぬというのである。

現実には、文章の教育は、ほとんど文学作品を通じておこなわれているようである。国語の授業は、しばしば国文学の授業とインドウされている。そして、国語をおしえる教師のおおくのひとが、国文学の出身で、文学への指向性が異常につよいのがふつうである。

今日においては、すこしちがったかんがえかたをしてみる必要があるかもしれない。国語と国文学は、まったくべつの教科とかがえては、どうだろうか。国文学の授業は、国文学専攻のひとがうけてよい。しかし、国語の問題、ひいては文章の問題は、むしろ、情報工学の問題としてかんがえたほうがよいのではないか。大学でいえば、工学部に情報工学なり言語工学なりの学科をつくり、その出身者が担当するようにするのである。

やや急進的な意見かもしれないが、将来の日本文明における知的生産の技術、とりわけ、文章によるコミュニケーションの重要性をおもって、こういうこともかんがえてみたのである。

(梅棹忠夫『知的生産の技術』による)

問一 傍線部1～5のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は楷書で丁寧に書くこと。

問二 波線部ア「わたしどもの目からみると、このような二極分解は、すこしこまるようにおもう」とあるが、どう困るのか。最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 文章技術の本は、現状では主に文芸的なものかビジネス的なものに大別されているが、実際に現代人が書く文章の大半は、文芸的でもビジネス的でもない知的文章、記述的文章であるため、どちらの系列の本も参考にならず困る。
- 2 文章技術の本は、一般の人の要求に応じて書かれているが、文芸家が書いた文芸的文章法の本かビジネス関係の人が書いたビジネス文章法の本しかないのが現状である。しかし筆者らは普段、文芸的でもビジネス的でもない文章を書いていないため、どちらの本も参考にならず困る。
- 3 現代人がよく書く文章は、芸術的な文章でもビジネス的な文章でもないただの文章であるため、参考となる文章技術の本がない。筆者は文章技術の本を書きたいのだが、一般の人の要求に合うものが書けるかわからないので困る。
- 4 知的生産のための文章は、芸術的な文章やビジネス的な文章である。このような文章をきたえるためには、情報工学や言語工学の知識に基づいた文章技術の本が必要だが、今はそのような本がないので困る。
- 5 現代人は、文芸的な文章よりもむしろ知的文章、記述的文章を書くことが多い。そのため、一般論として、ビジネス系の文章技術の本を参考にした方がよいが、ビジネス系の本はたいがい手紙や広告の文章しか書かれていないので困る。

問三 波線部イ「近代日本語が、文章を書道から解放することに成功したのは、大進歩であった」とあるが、近代以前はどうだったと言っているか。本文の言葉を用いて、二〇～二五字で説明しなさい(句読点を含む)。

問四 知的生産のために必要な文章とはどのような文章だと筆者は考えているか。本文中から五〇字以内で抜き出して、最初と最後の五文字を書きなさい（句読点を含む）。

問五 本文の内容と合っているものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 現代の情報化社会においては、文学的文章は必要ない。むしろ、非文学的文章を書けることこそ重要である。したがって、大学の国文学の授業は、国文学専攻の教員ではなく、情報工学や言語工学専攻の教員が行うべきである。
- 2 文章というと、文学的な文章でなければならぬと思うかもしれないが、そうではない。むしろ、文章を文学から解放し、言語芸術から独立した、じゅんすいなコミュニケーション手段として発達させるべきだ。そのためには、文章の問題は、情報工学の問題としてかんがえたほうがよい。
- 3 今、文章法の本は文芸的なものかビジネス的なものしか出版されていない。しかし現代人が最もよく書くのは、知的文章、記述的文章である。そのため、大学では文学の授業をなくし、そのかわりに情報工学や言語工学を必修で学ぶべきだ。
- 4 文学者の書いた文章は個性的で面白いが、普通の人には参考にならない。なぜなら、私たちが書く文章は芸術的である必要はなく、むしろ非芸術的であるべきだからだ。したがって、文学を否定はしないが、大学で学ぶ必要もないと考える。むしろ情報工学を学ぶべきだ。
- 5 文学は必要ないという人がいるが、そうではない。かつてのような美文調の文章はやらなくなったとはいえ、依然として人を感動させることができる文章が評価され、芸術的な文学作品となる。したがって文章の教育は、国文学専攻の教員によって文学作品を通して行うべきだ。